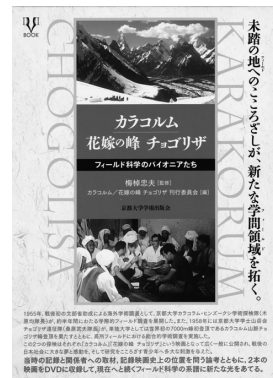


カラコルム、花嫁の峰 チョゴリザ

フィールド科学のパイオニアたち

梅棹忠夫監修, カラコルム/花嫁の峰 チョゴリザ刊行委員会編
 京都大学学術出版会
 2010 年 3 月 15 日発行, 265 頁, 3800 円 (税別)
 ISBN978-4-87698-933-1



本書はまさに題名にあるように、「フィールド科学のパイオニアたち」の物語であるが、その主役は本文の内容というより、本書に付属する記録映画 (DVD) 映像であろう。記録映画については、本書の中に、探検および登山の当事者達の当時の文章の抄録が手際よく編集されており、この映像の背景を知ることが容易にできる。

それはさておき、本書の文章を読む前に、是非この二つの記録映画を見ていただきたい。「カラコルム」(1956) は 1955 年の京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の記録であり、「花嫁の峰 チョゴリザ」(1959) は 1958 年に AACK (京都大学学士山学会) によって初登頂されたカラコルム、チョゴリザ峰 (7654 m) の登頂記録である。どちらの映像も現在においてなおその記録価値を失っていない、当時としては出色の映像、編集技術に感心するばかりではなく、映像の背後にある記録対象の時代的意義を 50 年過ぎた現代の我々に明確なメッセージとして伝えているのである。

記録映画はどちらから見てもよいが、評者としては年代順に「カラコルム」をまず観賞してほしい。「チョゴリザ」からという登山好きな方がおられても結構だが、両者間の 3 年という時間間隔は、二つの企ての「仕掛人」であった (と思われる) 今西錦司にとって重要な時間差と思えるからである。

この二つの記録映画が世に出た 1956 年、58 年は昭和年代でいえば 31 年、33 年で「もはや戦後ではない」という言葉が一世を風靡した時代である。しかし、戦後 10 年を過ぎてはいたが、まだ戦

前、戦中、戦後という時代感覚が人々の言葉の中で生きていた時代でもある。ネパール・ヒマラヤ、マナスル峰 (8163 m) の初登頂が 1956 年、また第 1 次南極観測隊が「宗谷」で日本を出発したのも 1956 年である。

人々が、確かに「戦後」という陰鬱な時代を抜け出し、新たな世界、新たな時代を求めている、そうした時代を印象づける出来事の記録という側面を持っている。

評者の個人的追憶を許していただけるならば、当時の新制高校の 1 年生として見た「カラコルム」は木原隊長、今西支隊長のヘルメット姿が目には焼き付いているとともに、「カラコルム」(現在は一般にはカラコラム) という地名が明確に高校生の脳裏に刻まれた出来事であった。この遠征に参加され、最近逝去された梅棹忠夫さんが著された「モゴール族探検記」(岩波書店) は評者にとって人生の進路に影響を及ぼすほどの感銘を受けた探検記であった。当時の 16 歳の少年にとって、梅棹隊員の調査するモゴール族の世界は映像としてのアフガニスタンの自然と重なって、想像をはるかに超えた“未知なる世界”を垣間みた瞬間であったかもしれない。「チョゴリザ」の記録は、その映像のすばらしさは言うまでもないが、望遠レンズを通しての静止画による登頂の瞬間の描写は“息詰る迫力”という以外に表現できない。最終シーンのたき火を囲んでの寮歌の合唱はある意味での京大探検学派の万感の思いの象徴であり、本文第 1 章「戦後学術調査の黎明」の序章をなしている。彼ら探検派の歴史を記した本章は、その簡

潔な記述と相俟って本書の価値を高らしめる一章であろう。その系譜である AACK の現在の会長は雪氷学会会員の上田豊さんであり、第 6 章「フィールド科学の展開」では、同じく会員の横山宏太郎さんが南極観測について、幸島司郎さんが野生動物学についての一文を寄せている。彼らの最近の活躍ぶりからすれば、ここで敢えて紹介の必要もあるまい。南極観測と言えば「カラコラム・ヒンズークシュ学術探検隊」を組織した、木

原 均、今西錦司さん達はその初期の立ち上げに深く関わり、第 1 次越冬隊に西堀栄三郎さんを送り込んだ立役者たちである。昭和 30 年代に新たな方法論としての位置を獲得したフィールド科学は今も連綿と続いていると言うべきだろう。

(国立大学法人総合研究大学院大学 監事
国立極地研究所 名誉教授 渡辺興亜)
(2010 年 8 月 3 日受付)